

2024年度 亶理町地域おこし協力隊 活動報告

亶理町地域おこし協力隊 久保田沙耶

2025.03.31

01 自己紹介

02 2024年度の活動方針

03 2024年度活動報告

03-1 地域資源を発掘し、活用したアート作品の創造

03-2 作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化

03-3 作品の展示発表による地域資源の情報発信

04 任期満了後について

01 自己紹介

久保田沙耶

Saya Kubota

Artist Essayist

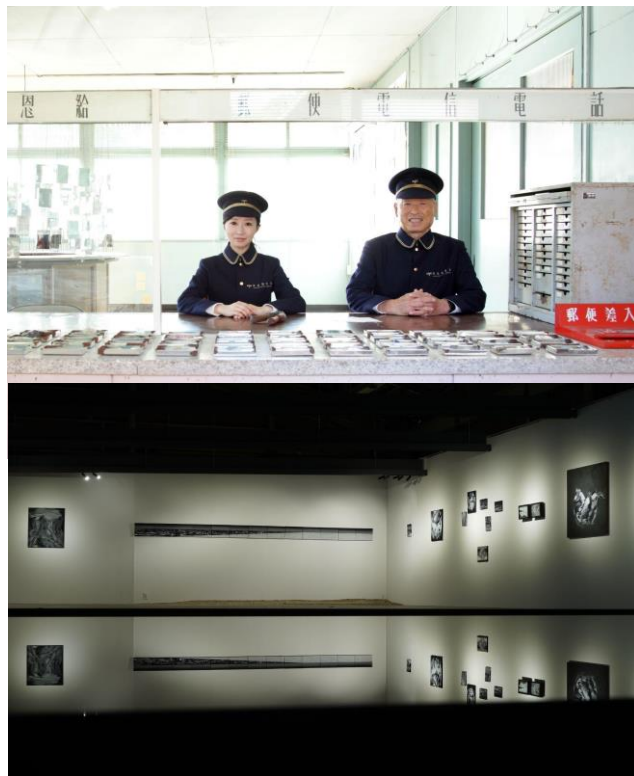


(左上) アートプロジェクトの例
「漂流郵便局」2013-

(右上) パフォーマンスの例
「その風の色」2023

(左上) ペイティングの例
「砂と泉」2024

(右下) 執筆の例
「もぬけの城、執筆風景」2022



現代美術家、随筆家。1987年、茨城県生まれ。筑波大学芸術専門学群構成専攻総合造形、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修士課程修了、同博士号取得。日々の何気ない光景や人との出会いによって生まれる記憶と言葉、それらを組み合わせることで生まれる新しいイメージやかたちを作品の重要な要素としている。焦がしたトレーシングペーパーを何層も重ね合わせた平面作品や、遺物と装飾品を接合させた立体作品、さらには独自の装置を用いたインスタレーションなど、数種類のメディアを使い分け、ときに掛け合わせることで制作を続ける。個展「Material Witness」(大和日英基金) や、アートプロジェクト「漂流郵便局」(瀬戸内国際芸術祭) など、多数参加。

02 2024年度の活動方針

東日本大震災の被災地として自然災害について調べ、未曾有の災害によって色濃く出ている亙理町民の精神性に惹かれた。自分自身も一住民として暮らす中で、「制作者」としてのアイデンティティを利用して、日常の中に「郷土性」を見つけ、形にしていき、目に見える形で土地との対話を続けることができた。絵画、立体、随筆と多岐にわたる方法で日常をとらえ、「未来の収蔵品」として郷土資料館で展示等行った。

2021～2023年度

零線に触れる物に出会い、人と出会い、出来事と交わり、自然と生まれてくる作品を亙理町の暮らしの中で制作、町民への寄贈をおこなう。東日本大震災について、各所アーカイブのある施設に訪問し、被災者からの話もききながら、自然災害における自身の捉え方を認識した。



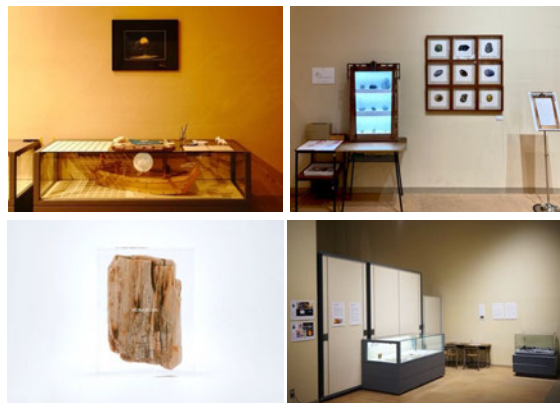
2022年度

郷土とは一体なにか。東日本大震災の被災地としての亙理町からいちど視線を離して、日常的な変化や住民として感じることを大切にエッセイ、平面作品、立体作品などに記録をしたためた。



2021～2023年度

魚住英司隊員と郷土資料館にてプロジェクトの展示を実施。



亘理町での暮らしから生まれる作品を制作し、完成作品を発表する機会をもうける。よそ者の視点と住民としての当事者の視点双方を行き来する中でこそ見えてくる地域の特性や生き方の普遍性を題材とすることで、初年度より考えてきた「心の減災」について制作をもって肌で実感し、理解を深める、

地域資源の発掘及び開発に関する活動

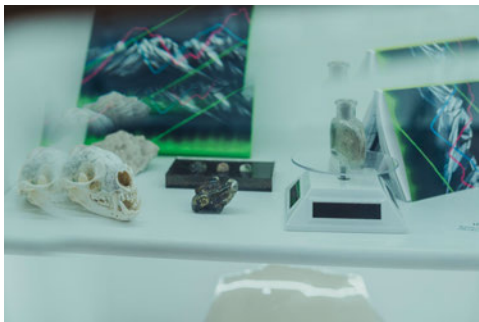
地域資源を発掘し、活用したアート作品の創造

地域の活性化に関する活動

作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化

地域の情報発信

作品の展示発表による地域資源の情報発信



作品写真: YOSHINOBU MOTODA



東日本大震災の被災地としての亘理町という認識から一度離れ、日常の中で必然的な創作活動をすることで、被災大国日本のどの地域にもどこか共通するが、亘理でしか見つけることができなかった隠れた地域資源を発見し、作品化することで、ここにいた痕跡を自分にもその土地にもしっかりと残し、表明する。また、遊び心を忘れず、自分自身が心震えるものを感覚を信じて遊び尽くしながら制作する。

1、いまここに眼を向ける

「被災地」として亘理町を捉えることをやめると決めたきっかけは、荒浜で見つけた貝にある顔の落書きだった。当事者ではない人間が、災害危険区域について「かわいそう」というフィルターを介していることがとても暴力的だと感じた。どんな土地においても喜びや悲しみは常にあり、最も重要なのは今この時に賛美できる何かを見つけることだと感じさせられた景色だった。



きっかけとなった貝の写真(荒浜)

2、人間以外の視点

東日本大震災後、約 10年が経過してから初めて出会った亘理町。どんなに資料を見つめたところで震災以前のこの場所を味わうことなどできないとわかった。しかし、はじめて訪れた蛭塚のウミネコや震災後いち早く荒浜に戻ったタヌキの群れ、今も昔も変わらない荒浜の風と波が交わる砂埃と潮飛沫を真摯にみつめることで、本質的なこの土地の郷土を味わい、より本質的な眼差しを向けられると気がついた。



蛭塚のウミネコと震災後いち早く海岸へ戻ったと新聞で知ったタヌキの足跡
(2024年12月に鳥の海引き潮時にススキの間の獣道にて発見)

2、遊ぶように暮らし、作る

カラスが防潮堤の上を風のサーフィンをするように遊んでいる姿を多く目にする。カラスは環境に適応することで積極的に都市に進出した。生物の進化は、形態や生理機能、行動を変えてみることでより環境変化に適応することだ。震災という大きな変化を受け入れ生きる人々は遊び心がある。木登りが好きなこどもは筋肉を鍛えるために木登りをしないように目的のために一義的に物事を思考するのと違って、遊びには複数の視点がある。その非真面目とも言える眼差しこそが「生きる」ことそのものであり、その中でしか作れない作品をここ亘理で制作せねばならない。



上：震災後亘理町のボランティアにもいらしていた砂時計職人の金子硝子工芸の金子貴さんとの作品打ち合わせ会議。「面白いから一緒に作ろう」の一言が嬉しい。
下：初年度に絵を寄贈した福島さんに教わった砂鉄とりの遊び。夢中になった。この体験が作品そのものになっていった。(作品「砂まじり」)

03 2024年度活動報告

- 1

地域資源を発掘し、活用したアート作品の創造

地域資源の発掘及び開発に関する活動

亶理町の地域資源を発掘し、活用したアート作品の制作と発表
- 2

作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化

地域の活性化に関する活動

制作過程の共有資料室「わたりに舟案内所」の創設
- 3

作品の展示発表による地域資源の情報発信

地域の情報発信

2024年度活動集大成展示

亘理町の地域資源を発掘し、活用したアート作品の制作と発表

企画概要

2024.04 時点

[Why]

亘理町で隊員として、芸術家として暮らす中で得た体験を作品を通して共有するために

[What]

絵画作品と小立体作品、エッセイを制作し、その絵画作品や小立体の作品集などを

[Who]

住民・町外の人たちに

[When]

今年度末に集大成として

[Where]

亘理町内の公共施設にて

[How]

展示発表をおこない、適切な場所や人に最終的に作品寄贈ができるよう展示を機会に改めて住人と対話する。

いつもあのかんじ

reversible atmosphere

制作: 2025

素材: 砂時計状ガラス、阿武隈川の砂、砂鉄、ガラスビーズ、ミクストメディア



震災後こわくて浜にいけなくなった人たちの話を聞いた。私はよく荒浜に行く。砂紋をみるにつけて、いつしか安堵感を覚えるようになった。荒浜の砂は硅砂やチャート、ほか様々な砂と混在して、かなり高い割合で砂鉄がある。砂鉄の比重は他の砂に比べてかなり高いので、風によってできる砂紋は、真っ黒な砂鉄と真っ白な硅砂のグラデーションでどの浜ともちがう特別な紋様をしている。この浜のもつ独特の砂紋を、たとえ浜にいかなくても追体験することはできないだろうかと考えた。かつて賑わっていた荒浜、7mもの防潮堤に仕切られ大きく様相を変えたが、風や波は今も昔も変わらない。すぎゆく時間で失われるものを嘆くだけではなく、今を「味わい」、過去をなつかしく賛美するための砂時計を作ろうと思った。

震災後亘理町にたまたまボランティアにいらしていた日本で数少ない手作りの砂時計職人の工房である金子硝子工房の協力をえて、砂浜の砂紋を再現するため、阿武隈川河口から砂を少量採集し、洗浄、重みごとに砂を分け、どのような配分にすれば荒浜の砂紋を砂時計内で再現できるか試行錯誤を繰り返した。最終的に、荒浜の砂紋そのものを思い出せるような砂紋を砂時計の中に再現することに成功した。

何らかの理由で荒浜から足が遠のいた人たちが、かつての海にまつわる多くの思い出を砂時計をひっくり返せば何度でも再生できる、亘理の郷土が育んだ強くしなやかな心をいつだって確かなものだと感じ取れる一つのお守りのような役割になればと願う。



Photo by Yoshinobu Motoda

重力の愛

gravity is love

制作: 2025

素材: 砂時計状ガラス、阿武隈川の砂鉄、ミ
クストメディア

亘理町の適切な機関に寄贈予定の作品。

寄贈先を3つほど検討中。



製鉄場の遺跡が発掘されるなど、太古より亘理郡は鉄産業が盛んで、島根の出雲と同時期に産業が発達していたという記録も残っているほどだ。震災前の浜や川での遊びについて住民に伺うと、みんな子供の頃に磁石を持って砂鉄とりをしていたと聞いていた。今回、この砂時計制作に協力していただいた金子硝子工房は、砂鉄の砂時計をつくって約100年になる。砂鉄は重さがあるため、しっかりと時間を計測できるが、今一般的に砂時計制作を許されているのは砂漠の砂鉄のみである。砂漠の砂は風による摩擦で砂の形状がかたちづくられるため、ひとつぶひとつぶが風化して割れたりかけたりしているので、球状のものは少ない。それに対して亘理町の砂鉄は、川と海の波間で、水中で砂同士がやさしくこすれあい、研磨されていくので砂の粒がほぼ球状になっている。液体のように砂時計の穴から落ちる砂は、おちると同時に下の空気を上の空洞へもちあげる微弱な風によって、重力のまま落ちていくことはできないが、砂漠のかけた不揃いな砂にくらべて球体でしっかりと重さのある亘理の砂は空気抵抗を受けにくくとても正確に時間が計測できるとのことで職人も驚いていた。あまり目に止めることのない、遊びの果てに見つけた鈍色の砂たちは、どの砂時計よりも正確に時間を刻む。隠れた資源として、亘理の町中のどこかで働き者になってもらいたく、寄贈場所をさがしている。



Photo by Yoshinobu Motoda

すきまどけい

In - Between Time

制作：2025

素材：理化学ガラス、砂、砂鉄、漂着物、ミク
ストメディア



その日は日差しもそこまで強くなかったので、仕事の息抜きに昼間一度海を見に行った。ひとまず砂の上に座ってぼんやりした。しばらくして仕事に戻ろうと立ち上がる時に両手にぴっちり砂が張り付いていた。手を叩いて振り落とそうと思った瞬間、息を呑んだ。赤い珊瑚、小さい完璧な透明な巻貝、螺鈿の虹色、黄色い瑪瑙、水色の鉱物、透明な鉱物、紫色のウニの棘、バフンウニの緑や紫の四角い断片。砂は鮮やかな命のかけらたちで、あまりの美しさに一粒たりとも叩いて振り落とすことなんてできないと思った。色ごとに分けた砂や砂利を、ぽっかりと砂時計の中に浮かばせる。一つの色に向かって肩を寄せ合う砂粒にはもはや、自然と人工の境界などなく、とある一つの営みとしてただただ混ざり合い、時間も刻まない。ただ、ここに在るだけ。



作品部分



色分けした砂

1 亘理町の地域資源を発掘し、活用したアート作品の創造 _制作作品①



青色 緑色 黄色 肌色

赤紫 朱色 赤茶 黄茶



左:青白 右:黄白

Photo by Yoshinobu Motoda



いのちのあぶく

inside out bubbles

制作: 2025

素材: 理化学ガラス、阿武隈川の砂、砂鉄、
石英、チャート、ミクストメディア



むかし漁に使われていたガラスのブイを「わたりざった市」で見つけた瞬間、幼い頃に読んだと図鑑にあった波打ち際のお気に入りの話が蘇ってきた。「いのちのはじまりかた」についての話だった。その図説と物語の中では、海は命のスープのような感じが、しばらく命は誕生しなかったとあった。あるとき、波に揉まれて泡(あぶく)ができたときに、それは命の膜となり、その中ではじめて「ひとつ」としての命が生まれたと書いてあった。かつてみんな一緒にいたスープから区切られて、私たちは別々の命を得たというその話は頭から離れなかった。

私は未分化の状態の亘理町を知らない。全国で画一化された復興形式によって海と陸とは高い防潮堤に隔たれた。資料をみれば、ゆるやかに海と陸と丘と山とがつながる亘理町の地形の絶妙な差異によって、人、植物、動物のすべてがそれぞれ様々な習慣を築いてきた。タヌキやサザンカ、鳥たちや人々の話し声をきけば、まだそこにあるとわかる。脈々と繋がれたきたその土地特有のたくさんの人の仕草や出来事や物語、精神性が、震災や近代化によって変化した地形や景色によって、生み出された瞬間やルーツを簡単に探ることが困難になっている現実をひしひしと感じた。手作りで仕立てられていく薄い強化ガラスの砂時計の中にある砂を見ているうちに、そのすべての出来事のはじまり、命の始まりを、もう一度あぶくの状態に封じ込めて、土地の手触りや郷土、ここではないといけない理由を、個人個人がちがったやり方で思い出せるような世界の一片として手で握ることができるような装置を作れないか考えた。そして、ここ亘理で採取した土地のかげらを、このガラスのあぶくの中に封じ込めるという作品に思い至った。よろこびがころがりひろまる。



砂まりも(いのちのあぶく)
spirit of the shorelines

制作:2025

素材:理化学ガラス、阿武隈川の砂、砂鉄、
ミクストメディア



『昔ねえ、荒浜で砂鉄取りしたよねえ。磁石で。』

真似して私も砂鉄とりが楽しくて仕方なかった。時間があれば磁石を持って海に向かった。

亘理町荒浜の砂には多く砂鉄が含まれている。調べてみると「古代日本の鉄生産核心地」として、「出雲地域」と共に現在の「亘理郡」が示されていた。他の砂と比べて砂鉄の比重の違いから、黒く煌めく砂鉄は砂紋のコントラストを強める。砂を持って金子硝子工房を訪れると、リビングの机の上に、小さなマリモが3つ入った瓶があった。小学生の頃育てていたマリモが懐かしかった。あの姿形には、生きているとは一体どういう状態のことかとハッとさせられる。磁石に張り付く健気な砂鉄の様相は、なんだかあのマリモとそっくりだった。荒浜の砂の中に球状の磁石を落とす。硅砂の混じる白い砂から、によっきりと、黒い砂鉄のマリモが顔をだす。砂と暮らしてみようと思った。

驚いたことに、展示会場にいらっしゃった亘理町の住民は砂鉄の存在をほとんど覚えていなかった。磁石についての状態の砂まりもを見せると「あああれか!」と思い出される方が多かった。そうか、遊ぶことに必死だった彼らが思い出すのは砂鉄という資源価値のある物質の存在ではなく、磁石に絡みついたあの液体のような毛のような不思議な形状、質感、時間だったのだ。遊び心を思い出しつつける「いのちのあぶく」として無事誕生した「砂まりも」はかつて荒浜であそんだ大人たちの住む亘理町ではより愛くるしく生き生きして見える。





Photo by Junya Igarashi

腐る宝石

エッセイ

2025

亘理町を題材に執筆したエッセイ。講談社文芸誌に掲載された原本に
絵画と写真を加え、一冊の本に仕立てた。

写真：

右奥が制作した本、

周囲の展示物はエッセイの重要な要素となったエレメント

左手前：タヌキの骨 中央手前：海底火山で溶けた石 右手前：砂が詰まったまま漂着した瓶

左奥：腐る宝石のペインティング作品 中央奥：荒浜の砂を樹脂で封入したもの、荒浜の小石

1 亘理町の地域資源を発掘し、活用したアート作品の創造 _制作作品③

「ほどく unweaving」Exhibition File

制作:2025

素材:紙、ミクストメディア



制作過程の共有資料室「わたりに舟案内所」の創設

企画概要

2024.04 時点

[Why]

作品が出来上がるまでの視座やリサーチで得た知識を共有することで、地域住民とのコミュニケーションの活性化や、アートという広い領域ならではの多面的な地域創生の意義や象徴を示すことで、他の地域からの集客も試みるため、

[What]

亘理町の地域性からインスピレーションをうけ、試作、制作、本作品完成までの工程資料を(リサーチ記録、リサーチ資料、作品習作と模型、スケッチの複写など)月に1度追加しながら

[Who]

住民が

[Where]

行き来しやすい公共施設にて

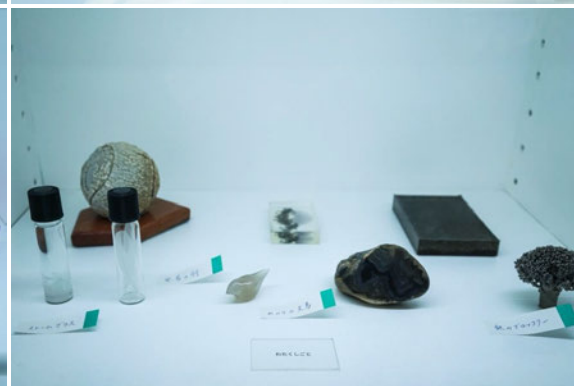
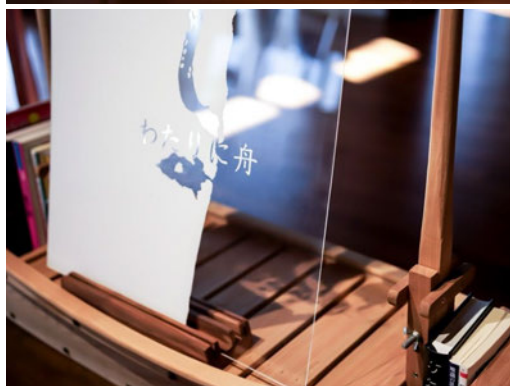
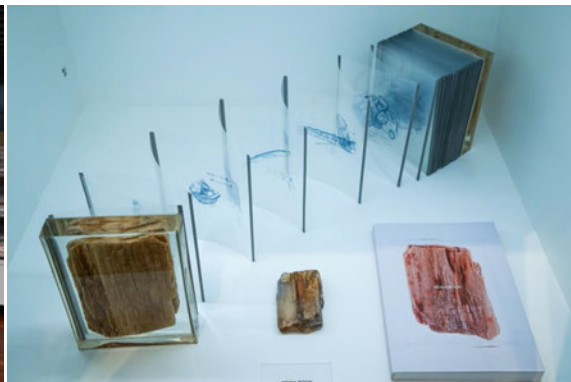
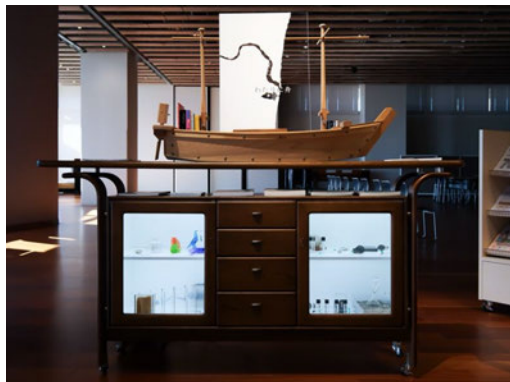
[When]

完成してから年度末まで

[How]

一つのプロジェクトとして展示棚を制作し、常設で公開する場を設け、最終的に寄贈する。会場の調整がつけばほか公共施設にも出張所の設置を検討

2024.11.25~2024.12.06の期間、亘理町役場1Fロビーにて制作過程のリサーチ展示を行った。役場に来られた方に活動の過程を公開した。(会場の利用制限により展示期間を当初予定から短縮して実施。)



わたりに舟案内所 公開によせて

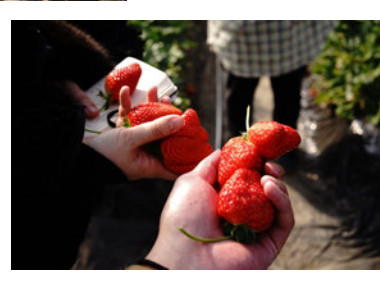
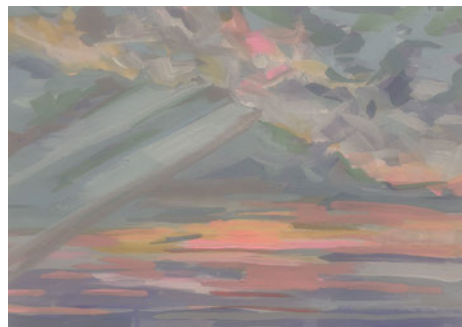
地域おこし協力隊として亘理町に移住して3年が経つ。「興す(おこす)」とはひっそりとしていたものを目立つ状態にしたり、衰えていたものを再び勢いづかせる、という意味だ。何も知らない土地で、いわば余所者とも言える私たちがものづくりを通して本質的に地域を「興す」こととは一体どういうことなのか問い続ける日々だ。しかしながら不思議なことに亘理町に本格的に移住してから「暮らし」と「ものづくり」がひとつの巡りとなるには、それほど時間はかからなかった。赴くまま町を歩けば気になった人や物や場所にご縁ができ、自然とものづくりをするようになった。その制作物によってまた新たな出来事に導かれ、またものづくりに至るという不思議な巡りができたのだ。亘理を想う時間はもはや仕事や生活、制作のためのものではなく、呼吸を整えて、物事との実直な出会いを味わう人間的な時間となった。物事との出会いにこれほど味わい深い喜びを感じることが普遍的、人間的な感覚だと思えたのは、それらが現代における一般的な出会い方とは真逆だったからかもしれない。目的地を定め、効率的にスマートフォンの地図通りに進む能動的な出会い方とは違い、まるで向こう側から我々の方へ物事がやって来るような極めて受動的な出会い方だったのだ。亘理町の地名の由来に阿武隈川を「渡る」というところから、やがて「わたり」になったという説がある。主体性や確実性、計画性が求められる現代社会とは真逆の予測不能な一艘の小舟は、地名そのものが「渡る」という動的な状態である「亘理」そのものかもしれない。地域おこし協力隊としてもものづくりにどう向き合うべきか悩んでいた私たちにとって、これらの体験はまさしく「わたりに舟」と呼ぶにふさわしかった。

「わたりに舟」が増えるにつけ、物も増えていった。それらを集積する為に、大きなキャビネットを地元の方に譲っていただくことにした。アパートのアトリエと寝室に挟まれたリビングの中央に設置し、「わたりに舟」に出会った証のようなものが次々と集まった。キャビネットの中で起こるあまりに自然な集積を観察するにつけ、我々にとって「仕事／生活」、「記録／作品」、「制作／遊び」といったありとあらゆるものの境界が溶けていった。そしてこのキャビネットを「わたりに舟案内所」と名付けた。展覧会で発表する「作品」は、いわば氷山の一角に過ぎない。作品を支える地盤には数限りない「わたりに舟」が存在している。しかし、ものづくりは内省的なものであり、紡がれる時間や姿を公開する機会は殆ど無い。地域おこしという観点において、完成した作品そのものよりも何艘もの舟での体験の痕跡を共有しあうことのほうがよっぽど重要であろう。なぜならこの「わたりに舟案内所」は、私が地域を「興す」のではなく、私が地域に「興された」旅路の確かな証拠の集積だからである。一人の人間として土地に「興されて」はじめて、私たちの身体の中にある自然なリズムが郷土のリズムに呼応していると知る。荒浜の激しい波の動きや、砂を吹き上げる風、たえず変化する阿武隈川河口のかたち、それらの律動が決して自分と無縁のところでおこなわれているわけではない。だからこそ、私たちはその土地に「興され」て、自分を通して故郷を観る。

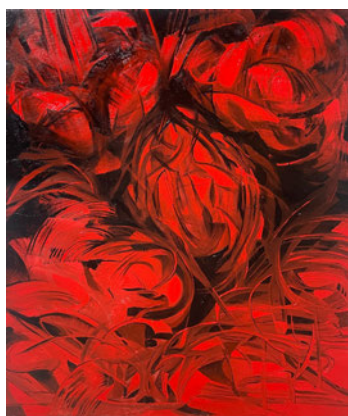
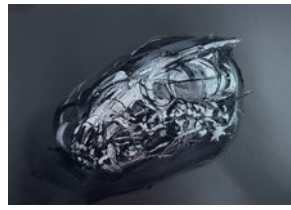
これからも失うものはあるだろう。しかし亘理では失ったものでさえ新しい地図になり次なる場所へ誘っていく力がある。その力は、郷土という名の強く深くなやかな礎によってこれからも永遠に流されることはない。そんな「わたりに舟案内所」が、我が家から多くの人が行き交う場所へ移設し、我々の心を興した「かたちなきもの」を、善きものであれ、悪きものであれ、どこまでも伝え合い、共に待ち合うことができることをとても喜ばしく思う。

地域おこし協力隊／わたりに舟案内人
久保田沙耶、魚住英司
(文：久保田沙耶)

2 作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化 _作品制作過程

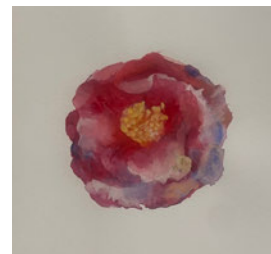


2 作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化 _絵画作品一部_寄贈作品選出について
(いずれかを寄贈作品にと考えていたが、これら作品では問題があると感じたため新たに制作を予定している。詳細は次ページにて)



2 作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化 _絵画制作時の花の品種についての勉強

花にまつわる絵画制作について、「椿」が「山茶花」かと役場の方に質問されることが多かった。町役場1 Fにて開催した展示「ほどく」の期間中に直接お話できればと思っていたが、ほとんどの方と展示でお会いできなかったため、参考とした資料を共有させていただきたい。「寒椿」と「山茶花」の見分け以外は出来るようになったが、制作した絵画については花の正式な名前の名状が難しいことがわかった。制作手法として歩くたびにたくさんの花を見て覚え、実物を見ずにスケッチし、抽象的に油絵に反映させていたため、「山茶花」とも「椿」とも言い難い作品となってしまったように思う。恥ずかしながら、はじめはなぜここまで詳細に花の名前を聞かれるのか不審に思っていたが、町のシンボルである植物はそれほど重要視される誇りあるものだったのだと今は身につまされている。町の象徴である「山茶花」を特徴的に捉えられなかったため混乱を招き、申し訳なかったと感じた。確かに今の私の描画の方向性は花の特徴を品種も特定できるほど具象的な絵画にはなり得ない。現代美術が郷土の何かそのものをモチーフとしたときに、責任をとれるのかどうか、という問題は過去もいくつか向き合ったことがあったがまだ答えを見出せていないのが正直なところだ。亘理町を舞台に制作した油彩画の一部は、2025日5月25日まで開催されている展覧会（茨城県出雲大社）に出展している。（これら絵画はキャンバスや絵の具も含め自費にて制作。結果として亘理 PRIにも自然と繋がるおもしろい、鳥の海で書いたエッセイや、作品についての解説文キャプションに亘理町のことを記入している。）今、展示後に寄贈予定としていた花の抽象画の発表は再度検討し、郷土の景色の絵画に変更し新たに任期満了後でも制作することを考えている。何より地域の方の心が動く作品を寄贈したい。再考するいい機会となった。



左:ツバキ
右:サザンカ

例:水彩でのスケッチ

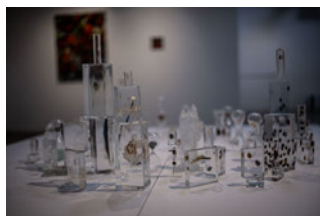
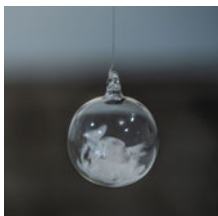
例:花の抽象画、油絵(部分)



花の名前の考察:
ツバキに似たサザン
カ?

花の名前の考察:
右上の花:
サザンカよりのツバキ?
左下の花:
サザンカ
いずれもスケッチより反映

寄贈作品については、作品「重力は愛」(砂時計)をすでに寄贈予定だが、ほかにもプラスアルファで町内の適切な場所にあらゆる作品の寄贈を検討している。現在それら亙理町の作品群を副業である展示のメイン作品として展示している。(出展分は実費にて制作)亙理町を舞台にしたエッセイ(鳥の海にて執筆)をコンセプトとしている個展「骨を漕ぐ」(茨城県笠間市常陸国出雲大社ギャラリー)がその展示だ。人生初の故郷茨城県で、亙理町での体験を主体とした作品を展示できて光栄だ。展覧会「ほどく」では物理的な問題もあり発表できなかった作品も展示中だ。来客者には手渡しで亙理町でのエッセイを差し上げている。亙理町在住の船大工、佐藤憲昭さんに制作いただいた木造船を用いたインスタレーションも会場全体を包む一つの装置となっている。いわゆる知名度をあげるための短絡的な「亙理町PR」ではなく、本当の「亙理町」特有の目に見えにくい資源を、絵画、立体、エッセイにして発表している。任期満了後であっても、これらの作品の発展や寄贈を検討している。



「骨を漕ぐ」作品シリーズ展示品一部紹介(左から写真1、2、3、4、5とする)

- 1、亙理町在住の船大工である佐藤憲昭さん製作の木造船「復興宝船」(ふれあい市場にて数年前購入)に木の根をはやし、砂でうめ、成果発表展「ほどく」にて制作した亙理の砂が入っている「いのちのあぶく」シリーズを絡めたインスタレーション「根の舟」。エッセイ「骨を漕ぐ」で登場する舟はこれを指す。
- 2、鳥の海を再現した、切り株と「いのちのあぶく」、鳥の羽を組み合わせたインスタレーション作品。(インスタレーション「根の舟」の一部)
- 3、狐塚の自宅で採取した飼鳥である文鳥の羽を「いのちのあぶく」として封入したもの。エッセイにも登場する。
- 4、鳥の海で採取した貝殻と、カニの手、ネジを封入したもの
- 5、インスタレーション「ためらいの星」、亙理町にて採取したものや、展覧会「ほどく」での作品をよりボリュームアップしたもの。今後もこのシリーズは続けていこうと思っている。

亘理町を舞台にした新作エッセイ。今後、このエッセイも含め執筆中の残り4編をまとめて書籍のような形にしたいと検討している。

To Row the Bone

造船とそっくりな雲が、一四年前に山へ引越した船大工の家の方へ鳥と一緒に渡っていった。
家に帰っていつもより大きいキャンパスに向き合ってみる。指のストローク、手首のストローク、肘のストローク。それぞれの事情でうねる線が、一斉に交わるわずかな時間のたしかな証拠。背が低かった中学時代、実家のカーベットを汚しながら体ぜんぶをつかって描いた五〇号。肩のストローク、腰のストローク、膝のストローク。おぼつかない線たちのこんなにもゆるぎないかたち。そうだ、いまわたしは春を迎えにいく途中。湿った肌を忘れて乾いた骨を漕いで描けば、向こうからつかしい故郷がやってくる。

二〇二五年春 久保田沙耶 亘理町鳥の海にて

To Row the Bone

に乗り三〇一号室に入る。波の音さえ聞こえない真っ黒な窓の無機質さに、動物病院にあった保温機を思い出す。機械の中で、文鳥は肩で息をしながら針金のような脚で前後に揺れる体を止まり木にくくりつけている。セグメントディスプレイの白く光る角ばった数字が鋭く目に突き刺さる。器内温三二〇℃。防潮堤七二日。いま文鳥と私の生存に必要とされる数字。

「防潮堤の上には海が乗っかっている！」

朝日で目が覚め、窓から見えた景色だった。嬉しくなって裸足のまんまベランダに出た。鳥が背後から海をめがけて飛んでいく。私の目は今あんな鳥の目と同じ高さに在るのだ。追いかけるようにしてホテルを出て防潮堤をかけるのぼる。荒る波の潮と風に舞う砂とが煙立ち、海と陸が溶け合っていた。きれい。おもわず深呼吸をする。波飛沫と砂埃。生きるも死ぬも一緒になったいのちの味が体じゅうに流れ込み、咳となって散らばった。そのとき私は少しだけ自分の命が軽くなったような気楽さを得た。この世の土と血の巡りを忘れて、砂と骨の巡りを思う。文鳥のレントゲンはただただ美しくかった。それはよるこびもかなしみも及ばない一つ所にある実感だった。むかしここにあった木

To Row the Bone

骨を漕ぐ To Row the Bone

床に赤く光るものがあつた。なくしたガーネットのネックレスを思い出して手を伸ばすと、倒っている文鳥の血の雫だった。急いで病院に連れていく。半透明な膜から滲む鮮やかな血色で甘いさくらんぼのようだった嘴や脚も、果実の熟れる前の真っ白さにもどっている。「明日死ぬかもしれない」、入院の手続きを済ませ家に帰る。風のあけくれの部屋は疲れたものの影ばかり、窓の外のガラスもだまって飛んでいた。今日も暴風注意警報。山と海の間にこのアパートはありとあらゆるものの通過点で、さっきはビニール袋さえ横切った。やるべき仕事をそのままに、流れる風に押されたつもりで海のはうへ出た。「鳥の海」と呼ばれる汽水湖では、ヒヨドリもセキレイもシラサギも夢中になって足下をついでいる。土と砂、淡水と海水のあいだの生々しくむせかえる干潟の匂いで今朝の藏んだ血がよみがえる。息が詰まって上を向く。空高く風のサーフィンを楽しむウミネコ。高いところはいいな。干潟の向こうに五階建てのホテルが見える。あまりに近所で泊まることなど考えたこともなかった。スマートフォンで検索、オフシーズン価格、勢いで予約する。薄暗い駐車場から見えるのは空と防潮堤と芝生だけ、このあたりから海を見たことは一度もない。チェックインを済ませてエレベーター

2 作品を介した地域住民とのコミュニケーションの活性化 _活動一覧



フィールドリサーチ	亘理町 荒浜海岸
	亘理町 阿武隈川流域
	亘理町 鳥の海
	宮城県 阿武隈山脈
	兵庫県 中央区沿岸
	兵庫県 塩屋
絵画作品制作	15点(任期满後も制作を続け、最適な寄贈先を検討)
小立体作品	56点
エッセイ	腐る宝石
	すきまのあるじ
	もぬけの城
	骨を漕ぐ
	かちかちやま(任期满後も執筆を続ける)
プロトタイプ	キットきと プロトタイプ多数
	砂時計 プロトタイプ多数
	and more
アイデアスケッチ	多数(ドローイングも含め)

2024年度活動集大成展示

企画概要

2024.04 時点

[Why]

活動成果を一過性のもので終わらせないために

[What]

昨年度も含めた活動内容全体をまとめた活動集大成展示を

[Who]

町内外の方と共有できるように

[Where]

亘理町や作品に合った施設で

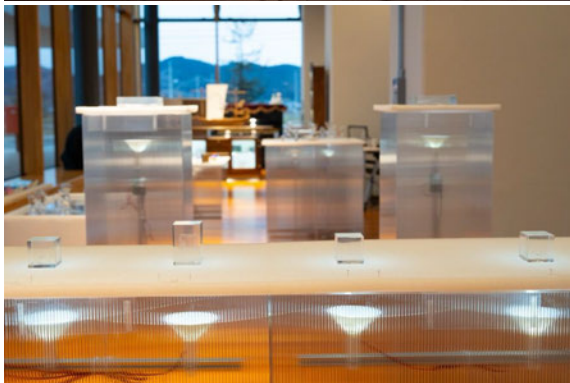
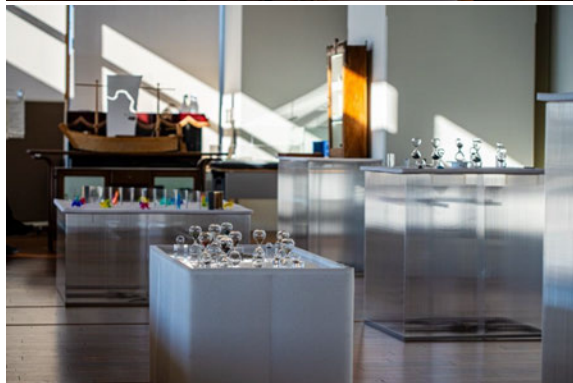
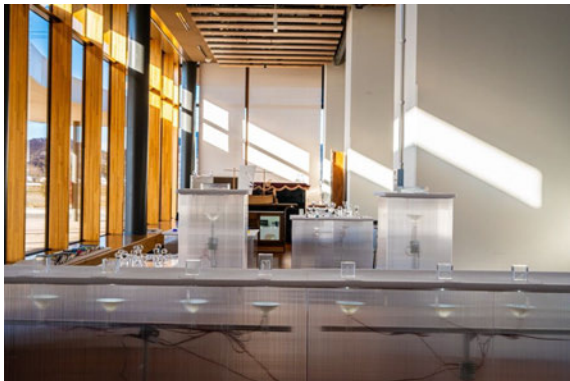
[When]

1月または2月に

[How]

展覧会を行う。アート批評家など作品に見合った専門家をお招きしてトークセッションを行うなど、活動を多くの人に知ってもらうための最終活動報告書としてアーカイブの制作を行う。

2025.1.20~2025.01.31の2週間の間、亶理町役場1F多目的スペースにて展示を実施。
光が多く入る多目的スペースを有効活用し、亶理町民の方々一人ずつと交流した。



亶理町役場1F多目的スペース
2025.01.20~2025.01.31

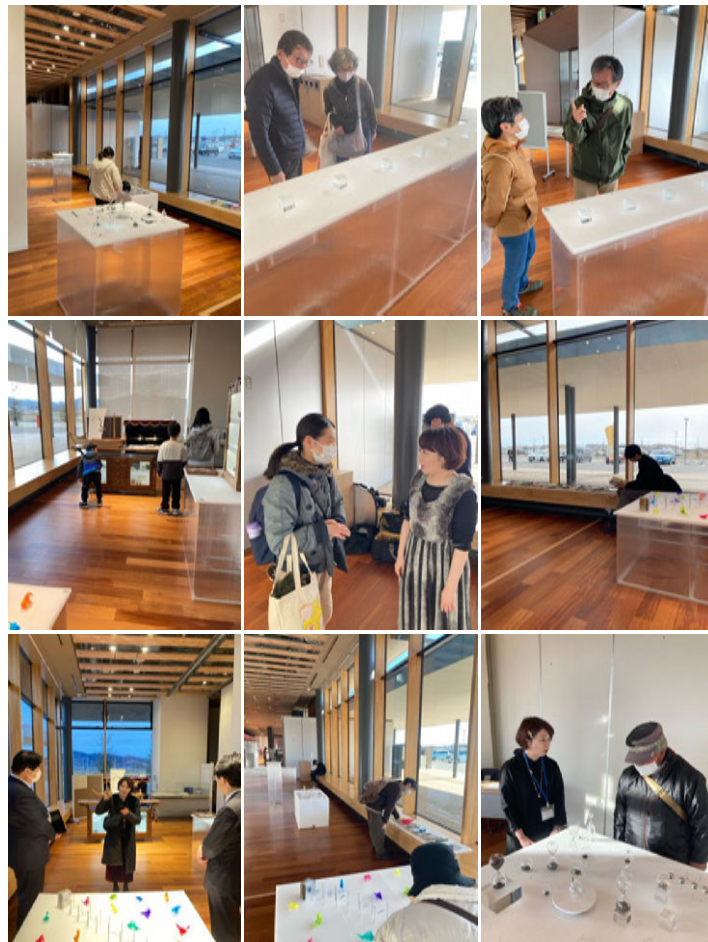
Photo by Yoshinobu Motoda

3 2024年度活動集大成展示 _亶理会場

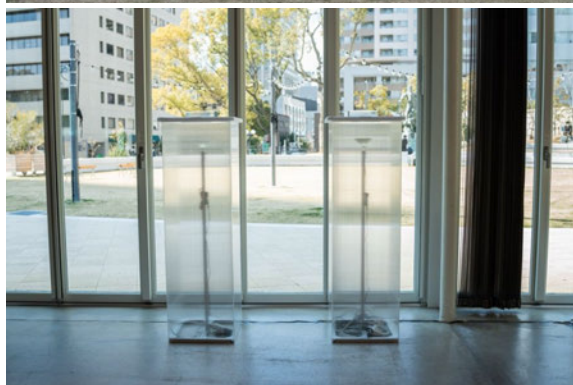
	1/20(月)	1/21(火)	1/22(水)	1/23(木)	1/24(金)	1/27(月)	1/28(火)	1/29(水)	1/30(木)	1/31(金)	
10:00~	5	3	0	5	3	1	1	4	4	7	
11:00~	6	7	2	1	1	6	1	1	1	1	
12:00~	3	4	4	5	1	3	3	4	3	0	
13:00~	4	0	2	9	4	8	5	5	4	2	
14:00~	0	1	3	2	0	4	4		4	1	
15:00~	5	3	1	0	4	0	0	5	2	8	
16:00~	5	5	2	1	1	0	0	1	5	8	総動員数
合計	28	23	14	23	14	22	14	20	23	27	208

役場に手続き等で来られる方を中心に、一人一人お話をしながら作品展示を見ていただくことができた。亶理町での暮らしについてや昔の亶理町の姿や、震災当時のお話など発見が多くあり、次の作品テーマにつながる交流をすることができた。

開場時間が役場の開庁時間に依存するため平日のみの開催となってしまったため、見ていただける方が限定されてしまったため、次回以降は休日開催も可能な場所を検討したい。



2025.2.07~2025.02.11の5日間、リサーチ対象としていた神戸市公園内施設 URBAN PICNICにて展示を実施。亘理町の認知拡大につながった。



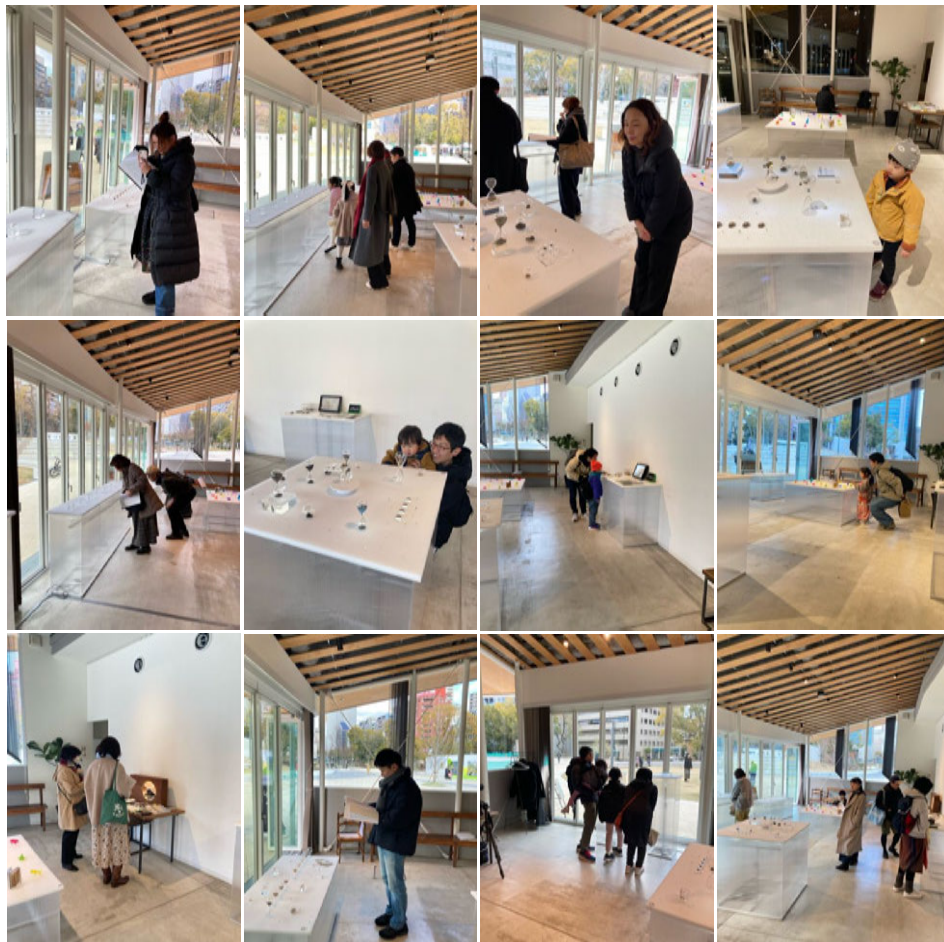
URBAN PICNIC(東遊園地
内)
2025.02.07~2025.02.11

Photo by Yoshinobu Motoda

3 2024年度活動集大成展示 _神戸会場

	2/7(金)	2/8(土)	2/9(日)	2/10(月)	2/11(火)	
10:00~		10	4	2	8	
11:00~		10	3	0	12	
12:00~	設営	16	14	3	14	
13:00~		15	9	10	38	
14:00~		2	6	9	28	
15:00~	1	8	28	2	11	
16:00~	1	7	12	0	10	
17:00~	0	5	9	3	9	
18:00~	2	7	5	1	撤去	総動員数
合計	4	80	90	30	130	334

神戸市役所の隣にある公園内の施設で展示を行ったため、お子様連れの方を中心に窓越しに作品を見つけて入っていただけた。
偶然公園に来た方に立ち寄っていただくことができたため、新たに亶理町を知ってもらう機会を作ることができた。大きな震災を体験しているという共通点もあり、東日本大震災時はボランティアに行かれた方などのお話を聞くことができた。



Pareto

unweaving

ほどく

令和6年度宮城県亘理町地域おこし協力隊
活動集大成特別展示

魚住 英司
Eiji Uozumi

久保田 沙耶
Saya Kubota

亘理会場 | 亘理町役場 1F 多目的スペース
2025年
1. 20 Mon — 1. 31 Fri
平日 10:00 - 17:00 開催

神戸会場 | URBAN PICNIC ラウンジ
2025年
2. 07 Fri — 2. 11 Tue
10:00 - 19:00 (初日 14:00 より、最終日 18:00 まで)

入場無料
Entrance Free

主催 / 魚住英司 × 久保田沙耶
協力 / 森隆夫 (会場デザイン)、有間会社金子研子工芸 (作品制作)

令和6年度宮城県亘理町地域おこし協力隊
活動集大成特別展示

ほどく unweaving

魚住 英司 Eiji Uozumi
クリエイティブディレクター—建築家。1989年、兵庫県神戸市生まれ。九州大学大学院人間環境学専攻建築学専攻修了。総合広告会社、デザインファームを経て、独立。Paseoを主宰。デザインの視点からビジネス・ブランド・プロダクト・空間などの戦略立案やコンセプト開発に従事。複数の領域を横断したクリエイティブ開発を得意とし、デザインとアートに関する研究活動を行っている。JPMクリエイティブアワード/金賞、Tokyo Midtown DESIGN TOUCH/出展、Milano Design Week Tokyo Award/選出など。

久保田 沙耶 Saya Kubota
現代美術家。1987年茨城県生まれ。東京、鳥取、宮城、兵庫などを拠点に活動。筑波大学芸術専門学群卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了後、同博士号取得。日々の何気ない光景や人との出会いによって生まれる記憶と言葉、それらを組み合わせることによって生まれる新しいイメージやたちを中心にして、平面や立体作品、さらには独自の装置を用いたインスタレーションなど、様々なメディアを駆使しながら制作を続ける。主な展覧に「material witness」(大和日美基金/2016)、主なプロジェクトに「漂流郵便局」(三浦戸内国際芸術祭/2013-)など。

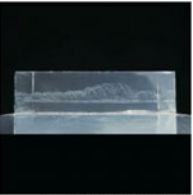
本展「ほどく unweaving」は久保田沙耶と魚住英司による展覧会です。2人(2021年度より宮城県亘理町に居を構え、地域おこし協力隊として、アートを通して地域を見つめてきました。(魚住の隊員としての活動は2023年度より)

活動拠点となる亘理町は東日本大震災の被災地です。災害についてより理解を深めるため、かつて魚住が被災した阪神淡路大震災の被災地である兵庫県神戸市と亘理町を往復しながらリサーチと作品制作を繰り返すことで、「震災」と「郷土」について考察を深めてきました。土地の成り立ちや震災からの経過時間も異なる2つの土地でのリサーチは、「地域」あるいは「地域おこし」の概念そのものに向き合うことになりました。本展制作において、地域おこしに求められがちな「新たな価値」は、どこか違う場所からやってくるのではなく、もうすでにその場所にあるのだと思い、寄り、そこから久保田と魚住は自身を羅針盤として土地を味わい、ささやかでも丁寧に土地の一端の喜びを出来るだけ形にすることに努めました。それらの行為は、制作とも、暮らしとも、仕事とも言い難い。土地にねむる宝石箱をひとつひとつ「ほどく」ような仕事でした。「わかる」の語源に「分ける」とありますが、土地を自身の身体を使って理解する姿勢は「分ける」のではなく、状態をそのまま受け入れ「ほどく」ように理解する営みでした。

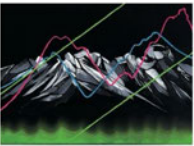
これらの作品は「復興」「防災」「被災」という言葉から一見離れているように感じられるかもしれません。しかし、ありとあらゆる出来事を人間的に受け止めるための、小さな美しい橋に違いありません。鑑賞者のみなさんの心にも、土地の持つ力を感じていただければ幸いです。



KEEKA BOOK 2024



「Unweaving Reading」シリーズ (2019) 2023



寝る宝石 2022



GOOD ROCK drawing 2022

クロストーク
魚住英司 × 久保田沙耶 × 小生浩己 (亘理町役場企画課)

日時: 2025年1月29日(水) 15:00 - 16:30
場所: 亘理町役場1F多目的スペース ※ご予約は必要ございません。

亘理会場 |
亘理町役場 1F 多目的スペース

〒989-3303
宮城県亘理町亘理町字惣屋1番地
展示時間: 10:00-17:00(平日のみ)



神戸会場 |
URBAN PICNIC ラウンジ

〒650-0001
兵庫県神戸市中央区加賀町5-4-1
東遊園地内
展示時間: 10:00-19:00



展示に関するお問い合わせは
お問い合わせフォームよりお願いいたします。





アートを通して地域を見つめてきた地域おこし協力隊による活動集大成展示「ほどこ unwaving」が1月20日より宮城県亶理町、兵庫県神戸市の2会場で開催

Pareto

2025年1月8日 12:00分



令和6年度宮城県亶理町地域おこし協力隊の魚住英司・久保田沙耶は、2025年1月20日（月）から1月31日（金）まで宮城県亶理町役場、2025年2月7日（金）から2月11日（火）まで神戸市のURBAN PICNIC（東遊園地内）の2会場で、活動集大成特別企画展「ほどこ unwaving」を開催いたします。アートを通して地域を見つめてきた2人のリサーチの記録や制作作品を展示いたします。
[Webページ] <https://www.paretoinc.net/watarai-unwaving/>

震災地のリサーチから制作した作品を展示

本展「ほどこ unwaving」は久保田沙耶と魚住英司による展覧会です。2人は2021年度より宮城県亶理町に居を構え、地域おこし協力隊として、アートを通して地域を見つめてきました。（魚住の隊員としての活動は2023年度より）

活動拠点となる亶理町は東日本大震災の被災地です。災害についてより理解を深めるため、かつて魚住が被災した阪神淡路大震災の被災地である兵庫県神戸市と亶理町を往復しながらリサーチと作品制作を繰り返すことで、「震災」と「郷土」について考察を深めてきました。土地の成り立ちや震災からの経過時間異なる2つの土地でのリサーチは、「地域」あるいは「地域おこし」の概念そのものに向き合うことになりました。本展制作において、地域おこしに求められながら「新たな価値」は、どこか違う場所からやってくるのではなく、もうすでにその場所にあるのだと思い至り、そこから久保田と魚住は自身を羅針盤として土地を味わい、ささやかでも明確にふれた土地の調の響きを出るだけ形にすることに努めました。それらの行為は、制作とも、暮らしとも、仕事とも言い難い、土地にねむる宝石箱

をひとつひとつ「ほどこ」ような仕事でした。「わかる」の語源に「分ける」があると言いますが、土地を自身の身体を使って理解する姿勢は「分ける」ではなく、状態をそのまま受け入れ「ほどこ」のように理解する営みでした。

これらの作品は「復興」「防災」「減災」という言葉から一見離れているように感じられるかもしれませんが、しかし、ありとあらゆる出来事を人間的に受け止めるための、小さな美しい瞳に違いありません。鑑賞者のみなさんの心にも、土地の持つ力を感じていただければ幸いです。

【開催概要】
展覧会名称 | 令和6年度宮城県亶理町地域おこし協力隊 活動集大成特別展示「ほどこ unwaving」
亶理会場 |
開催期間 | 2025年1月20日（月）から1月31日（金）10時から17時
開催場所 | 宮城県亶理町役場1F多目的スペース（住所：宮城県亶理町亶理町字惣里1番地）
入場料 | 無料
亶理町役場ホームページ | <https://www.town.watarai.miyagi.jp/>
神戸会場 |
開催期間 | 2025年2月7日（金）から2月11日（火）10時から19時
（初日14時より、最終日18時まで）
開催場所 | URBAN PICNIC ラウンジ（住所：兵庫県神戸市中央区加納町6-4-1東遊園地内）
入場料 | 無料
会場ホームページ | <https://urbanpicnic.jp/>
主催 / 魚住英司・久保田沙耶
協力 / 森岡太（会場デザイン）、有働会社金子樹子工芸（作品制作）

展覧会出展者

魚住 英司 Eiji Uozumi

クリエイティブディレクター・建築家。1988年、兵庫県神戸市生まれ。九州大学大学院人間環境学府建築学専攻修了。総合広告会社、デザインファームを経て、独立。Paretoを主宰。デザインの視点からビジネス・ブランド・プロダクト・空間などの戦略立案やコンサルティングに従事。複数の領域を横断したクリエイティブ開発を得意とし、デザインとアートに関する研究活動を行っている。JPM クリエイティブアワード/金賞、Tokyo Midtown DESIGN TOUCH/出展、Milano Design Week Tokyo Award/選出など。



photo: janyu isagami

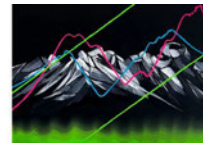
久保田 沙耶 Saya Kubota

現代美術家。1987年茨城県生まれ。東京、鳥取、宮城、兵庫などを拠点に活動。筑波大学芸術学部専門卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了後、同博士号取得。日々の何気ない光景や人との出会いによって生まれる記憶と言葉。それらを組み合わせることで生まれる新しいイメージやかたちを中心に、平面や立体作品、さらには独自の装置を用いたインスタレーションなど、様々なメディアを駆使しながら制作を続ける。主な個展に「material witness」(大和日美基金/2016)、主なプロジェクトに「漂流船便」(県内国際芸術祭/2013-)など。



photo: janyu isagami

展示作品



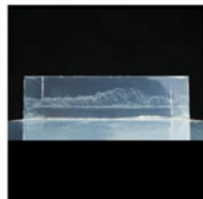
ほどこ unwaving 2022 (アクリル・ガラス、キャンバス)



GOOD ROCK drawings 2022 (色紙、鉛筆)



KEKA BOOK 2024 (活字木、樹脂、ミクストメディア)



unwaving theater ショー (PCB) 2023 (樹脂)

and more.

亶理会場では役場担当者を交えたクロストークも開催

「ほどこ unwaving」開催期間中の1月29日（水）は亶理町役場1F多目的スペースにて、地域おこし協力隊員魚住・久保田そして役場担当者である小生達己によるクロストークを開催します。亶理町で暮らす中での変化や、地域おこし協力隊として地域との向き合い方など、リサーチや作品制作の裏側をお話します。

【クロストーク】

開催日時 | 2025年1月29日（水）15時から16時30分

会場 | 亶理町役場1F多目的スペース

参加費 | 無料

参加方法 | ご予約は必要ございません。開催時間の10分前に会場にお集まりください。

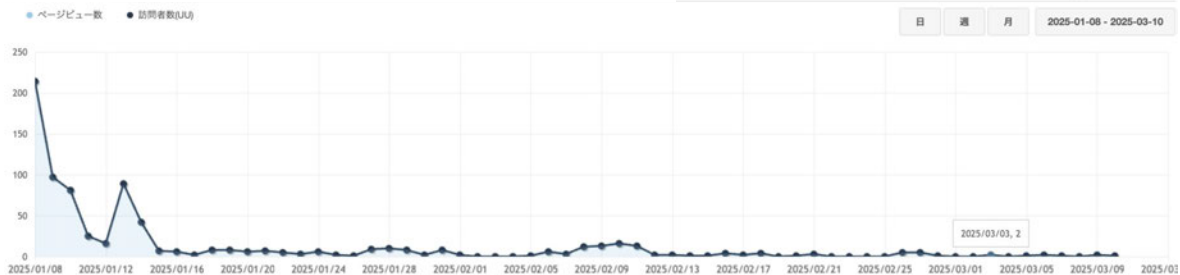
宮城県亶理町について

亶理町は宮城県の南部、仙台から南へ26kmほどに位置し、東に太平洋、西に阿武隈高地の広陵地帯、北には阿武隈川と雄大な自然に囲まれています。夏は心地よい海風が感じられ、冬は積雪量が少ないその気候は、東北の中でも比較的温暖です。広大な「海」に抱かれ、「山・川・里」が一体となった環境は、我々に四季折々の表情を見せ、海の幸、山の幸、里の幸とともに素晴らしい食料も豊富に届けてくれます。



3 2024年度活動集大成展示 _プレスリリース (配信サマリー)

アクセス数



768

ページビュー

768

訪問者数(U)

14

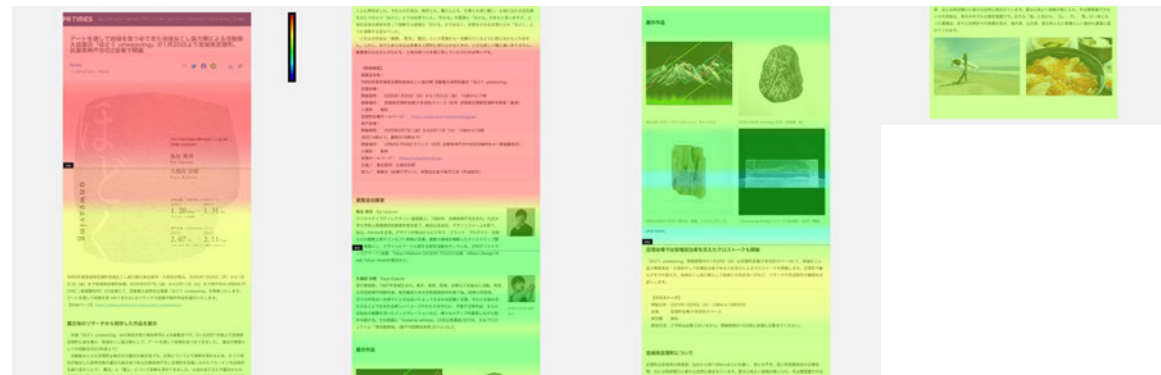
転載サイト

0

フォロー

配信日	タイトル	ページビュー	訪問者(U)	転載サイト	参照サイト	デバイス別アクセス	
2025年1月8日 12時00分	アートを通して地域を見つめてきた地域おこし協力隊による活動集大成展示「ほどく unweaving」が1月20日より宮城県亘理町、兵庫県神戸市の2会場で開催	768	768	14	4	PC 80.63% スマートフォン 18.77% タブレット 0.6%	詳細

ヒートマップ分析



転載サイト(14件)

- ・エキサイトニュース
・エキサイト株式会社
https://www.excite.co.jp/news/article/Prtimes_2025-01-11-153194-3/
- ・Infoseek ニュース(インフォシークニュース)
・楽天グループ株式会社
https://news.infoseek.co.jp/article/prtimes_000000003_000153194/
- ・GREEニュース
・Glossom株式会社
<https://jp.news.gree.net/news/entry/5352082>
- ・ニフティニュース(@niftyニュース)
・ニフティ株式会社
<https://news.nifty.com/article/economy/business/12365-3716250/>
- ・BtoBプラットフォーム 業界チャンネル
・株式会社インフォマート
<https://b2b-ch.infomart.co.jp/news/detail.page?IMNEWS4=5409972>
- ・@niftyビジネス
・ニフティ株式会社
https://business.nifty.com/cs/catalog/business_release/catalog_prt000000003000153194_1.htm
- ・マピオンニュース
・株式会社 ONE COMPATH
<https://www.mapion.co.jp/news/release/000000003.000153194/>
- ・おたくま経済新聞
・シー・エス・ティー・エンターテインメント株式会社
<https://otakuma.net/archives/prtimes/01083878612.html>
- ・SEOTOOLS
・ブラストホールディングス株式会社
http://www.seotools.jp/news/id_000000003.000153194.html
- ・エキサイトニュース
・エキサイト株式会社
https://www.excite.co.jp/news/article/Prtimes_2025-01-08-153194-3/
- ・ジョルダンニュース！
・ジョルダン株式会社
<https://news.jorudan.co.jp/docs/news/detail.cgi?newsid=PT000003A000153194>
- ・ニコニコニュース
・株式会社ダウンゴ
<https://news.nicovideo.jp/watch/nw17032369>
- ・@DIME(アットダイム)
・株式会社小学館
https://dime.jp/company_news/detail/?pr=2034609
- ・WalkerPlus(ウォーカープラス)
・株式会社 KADOKAWA
https://www.walkerplus.com/release/c153194_r3/

アートが好きで仕事のお休みをとってきました。協力隊が文化的な活動をしている亘理町はすごいと思います。素敵だし、羨ましい。

地域おこし協力隊の活動が見えづらいのもっと発信してほしい。役場で開催するのは目に触れやすいので良いと思うが、もっとわかりやすくしてほしい。

すごいねえ。亘理町の砂や石について全然知らなかった。自然に勝るものはないね。

今度海に行ったら砂とか石を探してみようと思いました。

趣味を探していたのですが、石や砂っていいですね。

神戸の震災の時にチャリティもしたけれど、まさか自分が被災するとは。東日本震災の時は能登の方が支援に来てくれたけど、今度は能登に支援しにいく立場になった。支援してもらった人が、今度は支援するというつながりができている。

震災の時は神戸に会社から派遣されて行っていた。こういう展示はいいですね。亘理は北海道の伊達市に人が移り住んで以降、特徴が少ないから何かこれをきっかけに根付けば良いですね。

砂鉄や石英がたくさんあることは知らなかった。たまたま寄ったけれど素敵なものが見れました。

歴史関係の仕事をしていただけ、KEIKA BOOKのような本の作り方は子供に作ってあげたいと思った。砂の展示は元々海の方に住んでいたのも、海を思い出せていいですね。販売されるならぜひほしいです。

子供が石を集めているので、グッとロックのように展示するのはいいですね。子供が塩の結晶作りにチャレンジしたり、透明標本も作りたいといっていたので、素敵なものが見れました。

変化があることっていいですね。亘理は気候が穏やかで変化を感じづらいので、日常的に変化が感じられるものがあると良い。

子供が砂、折り紙、石どれも好きなものなんです。幼稚園で子供が「ダイヤモンド集め」と名付けて石英を集めています。

旦那に面白いから見た方がいいよと言われて見に来ました。砂も珪化木も綺麗ですね。

趣味で絵を描いているけど、今のアートのことが知りたくて東京や横浜の美術館にもいっている。亘理で現代アートが見られるのは驚きました。見たい人はたくさんいると思うので仙台メディアテークにチラシを置くなど告知頑張ってください。

仙台からきましたが、このクオリティの高さの展示が見られるのは驚きました。見たい人はたくさんいると思うので仙台メディアテークにチラシを置くなど告知頑張ってください。

郷土資料館での展示「郷土をほどく」 2025.02.22 ~ 2025.05.11

活動集大成展示のスピノフの企画として、郷土資料館第27回収蔵品展と同時開催という形で「郷土をほどく」展示を実施。役場での展示期間に来られなかった亘理町の方々に見ていただける機会を作り、交流の場を広げた。



(左)
会場全体
(右上)
砂まりも
いつものあの時間
(右下)
Unweaving Reality
WATARI
KOBE

04 任期満了後について

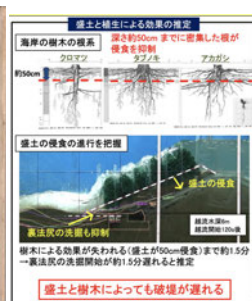
任期満了後、任期中に感じたことを個人として制作発表する

この任期は「なぜその土地なのか」というかねてより疑問を抱いていた事柄に関して、一つ答えが導き出せそうな充実した時間だった。亘理に直面しながら感じたことを発信/発表できたと感じられるものもあるが、亘理町の「地域おこし協力隊」として感じて発信することが難しいものもあった。「地域おこし協力隊」としての自分、「一町民」としての自分というものがダブルバインドである状態について答えが見出せないまま満了するのは、ここ数年の自分の視座を無かったことにするかのようで、どこか心苦しいものがあった。なので任期満了後は「郷土」を「興す」ということの本質的な意味と、表現の方法、発信するということの責任などについて時間をかけて向き合いながら、新しく執筆をはじめている「かちかちやま、再話」等を時間をかけて仕上げたい。

引っ越して数年間、さまざまなお気持ちを時に涙しながら、笑いながら、心を開いてお話いただき、亘理のみずみずしい土地の魅力を共有してくださったすべての町民の方々に感謝しております。また、アートという地域と馴染みが難しい分野からの地域おこしに協力的な姿勢で向き合ってくださった亘理町役場の担当者さまにも感謝申し上げます。今後も私にとってはまだ未知なる「地域おこし」について共にお話出来れば幸いです。そして、展示のたびに作品を能動的に観察し、ハッとさせられる感想をくださった、資料をご用意いただいた悠里館のみなさんには、何より関心を持って私たち地域おこし協力隊の存在そのものを尊重してくださったことに、深く感謝申し上げます。久保田沙耶



昭和45～46年(1970—1971年)潮干狩り風景



任期満了後に制作する作品のための資料の一部。亘理との暮らしはまだまだ続く。

Thank you